



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	退職にあたって
Author(s)	今野, 繁雄
Citation	北海道大学大学院農学研究科・農学部技術部研究・技術報告, 8, 30-31
Issue Date	2001-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35417
Type	other
File Information	8_p30-31.pdf



退職にあたって

生物資源生産学専攻生物生産工学講座 今野 繁雄
(作物・分析系 共同利用班)

昭和 32 年 6 月 農学部附属農場農機具部（農機具実験室）付けで採用辞令を受け、昭和 42 年 4 月に農学部農業工学科農業機械学講座に配置換えとなり、以後定年退職まで 43 年余、振りかえると農業機械の進歩と発展を目と肌で感じながらの 43 年間であった様に思う。この時期、農業は畜力から機械化への転換期で、当時（昭和 32 年）農場には耕耘機一台、英国製トラクター（フォードソンメジャー 42Ps 昭和 31 年導入・このトラクターは現在も現役として活躍している）が一台導入されていたが、畜力が主力で農作業が行はれていた。耕耘機、ティラー等の普及と共に輸入トラクターも増加し、農場も 2 台、3 台と輸入大型トラクターや大型作業機械等が導入され畜力から機械化農業へと大きく変化してゆく。昭和 38～39 年に行われた輸入・国産の営農トラクター、作業機械の性能試験（道立農試、北農試、北大、同工業教員養成所、畜大、普及所が参加）にスタッフの一員として参加し、一同に会した農業機械を目の前にした時、なんともいわれぬ感動と、将来の機械化農業を垣間見たような気がしたことを思い出す。農機具実験室には、火床、工作機械、溶接機等、実験・研究に必要な実験機材・装置等はすべてここで作られ、その他に農業機械等の実験・研究、学生実習に不可欠な圃場（水田 10 a、畑 80 a）を管理し、目的に合わせて四品種の作物を輪作体系で栽培していたが、専門外の私には失敗の連続で先輩の指導を受けながら必死に作物の栽培管理に取り組んでいた頃が懐かしく思いだされる。このように農作業をとおして得られた数々の貴重な体験や経験・知識

が今日まで頑張ってくれたものと思う。また、この間に農場を退職された先輩技官や同僚技官の方々には大変お世話になりました、あらためて感謝申し上げます。今日まで、大型化、効率化を求めて発展してきた農業機械も 21 世紀はロボット化と共に地球にやさしい農業がテーマとなり、食料生産基地としての北海道の重要度がさらに増し今後農業がどのように変貌して行くのか、農学部果たす役割と使命が問われ、また大きく期待されているものと思います。

平成 3 年に教室系技術職員の待遇改善の一環として、全学部で技術部が組織化され、農学部も第 1 回の技術部職員研修が附属牧場一泊の研修から 9 回目を数え、研究・技術報告集も 8 号の発行となり技術部の評価も高まりつつあるなか、人事院も技術職員の実績を重視するよう勧告に盛り込んできました。一方、文部科学省主催による技術専門官、技術専門職員研修が平成 11 年度から始まりました。我々もこの機会を有効に生かし、専門性にこだわらず他学部や他大学の技術部職員との交流を深め、情報交換を活発にし、視野を広げ幅広い知識を得ることにより、より自分自身の専門知識や理解が深まるものと思います。平成 13 年 4 月 1 日より附属施設改革により、北方生物圏フィールド科学センターがスタートし、附属植物園、附属牧場がセンター組織へ移行し、技術部もこの影響を受け平成 13 年度の技術部職員研修の計画や、申し合わせ規則を含め見直しを余儀なくされました。技術部をとりまく環境も、独立行政法人化問題、10 次定員削減等一段と厳しいものが予想されるなか、技術部職員の英知と結束を強め学部運営の一員として、技術部がさらに発展するよう祈念致します。今日まで大過なく過ごし定年を迎えることが出来たのは、技術部職員の皆様はじめよき先輩、同僚に恵まれたことと共に理解ある講座の皆様方のおかげであり深く感謝申しあげます。